

中学校における地域調査学習について (I)

—— 地理的分野「身近な地域」の構想 ——

錦織 馨・岩田 靖

1. はじめに

(1) 地域調査学習の必要性

身近な地域の具体的な社会的事象を教材化し、それを直接観察したり、調査したり、その結果をまとめたりする活動を取り入れた学習の意義は大きい。また、その必要性¹⁾は、いろいろと指摘されているが、次のようなものがあげられる。

- ① 我が国の歴史の展開や国土のようすを、身近な地域の具体相の中にとらえることができる。従って、生徒の体験や意識と結びついた身近で具体的なものから、一般的なものをより確実に把握させることができる。(知識・理解)
- ② 学習対象が地域事象であるから、五感を駆使した作業的・体験的な学習が行いやすく、能動的で主体的な学習活動が期待できる。(観察・資料活用力)
- ③ 1つの社会的事象を地域の多様な条件と関連させて、多面的にとらえさせることができ、総合的な思考力・判断力を培うことができる。(思考・判断力)
- ④ 自分とのかかわりから問題(課題)意識を生じやすく、学習に対する興味・関心を高めるとともに、学習を通して地域に対する愛着を深めることができる。(関心・態度)

本稿では、このような学習を、単に地域教材を扱った学習(地域学習)と区別するために「地域調査学習」と呼ぶことにする。従って、身近な地域の範囲は、社会科学学習としての直接観察や調査が可能な範囲である。また、地域調査学習における調査活動²⁾の種類は次の3つである。

- 観察——現地に出かけ、具体物を見る。スケッチや写真撮影を行ったり、歩測や数量的把握などの調査的活動も行い、直接的に事象に関する資料を得る。
- 聞き取り調査——役所、農家、工場、商店などを訪ね、関係者から話を聞いたり、資料をもらったりする。アンケート調査も含む。
- 文献調査——図書館や資料館などで、今までに調べられていることや統計資料・古文書を調べたり、複写したりする。現地でしか得られない文献等の調査に限定して考える。

(2) 本校社会科部の研究と課題

本校社会科部³⁾でも、昭和60年度より「自ら学ぶ力」を育てる学習指導のあり方について研究をすすめ、調査活動を取り入れた問題(課題)解決型の学習が有効であることを確認してきた。その学習指導は、次のような点に特色がある。

- ① 学習内容(教材)は、身近な地域にみられる社会問題であり、教材の選択基準として設定した誘意性、課題性、実証性、本質性、発展性の5つの基準に沿うものであること。その問題は、教師が与える場合と生徒に発見させる場合があり、さらに1つの共通問題を追求する場合と選

択した問題を追求する場合がある。

② 学習過程は、「問題の発見」→「原因の追求」→「問題点の究明」→「問題解決のよりよい方法の追求」を基本型とする。さらに、「原因の追求」の段階は、原因の予想 → 仮説の設定 → 検証計画 → 仮説の検証 → まとめと発表会 → 自己評価・相互評価とし、調査活動・表現活動を取り入れる。

③ 調査活動・表現活動の際、学び方の習得や主体性の育成のために、自己学習を重視する。何を、どのように調べ、調査結果をどのようにまとめ、どんな形で発表するかについて、教師の援助を受けながら、できるだけ自力で計画し、実施させる。また、主体的で有意義な活動を促すために、学習内容や方法についての自己評価・相互評価を重視する。

そして、第2学年で「身近な地域」「地域調査報告書づくり」、第3学年で「人間社会と家族」「地方自治と地域の課題」「公民レポートづくり」を重点単位としてカリキュラムに位置づけ、実践研究を行ってきた。その結果、「自ら学ぶ力」の育成度合を測定するために設けた評価項目のうち、いくつかのものにおいてプラスの徴候が見られる生徒が増加した。部分的な検証ではあったが、「自ら学ぶ力」の育成にとっては、このような学習が有効であることが確認できた。

しかし、地理的分野の指導を行ってみて、次のような問題点や疑問点も出てきた。

① 学習内容について。地理的分野においても、地域の社会問題をとりあげ、その原因を追求させることで地域の特色をとらえさせるように指導した。しかし、公民的分野の学習との重複があったり、社会問題と因果関係のある地域事象だけでは地域の特色をとらえるには不十分であったりした。地域の特色をとらえさせるのにふさわしい地域事象が、他にあってはならないか。

② 学習過程について。問題の原因追求を中心にし、問題解決法の提言にまで至る過程は、公民的分野の地域調査学習に適していると思われる。しかし、地理的分野においては、原因を追求し、解決の方法を明かにするよりも、問題となっている地域事象と他の諸事象との関連や、他の諸事象間の関連を明かにすることが重要である。分野目標・内容に応じた学習過程が必要ではないか。

③ 学習の個別化について。自力で調査計画を立案する段階でつまづく生徒が多い。検証に必要な資料や、確認すべき事実を論理的に導き出せないためである。学年段階に応じて、「自ら学ぶ力」の各要素の到達レベルを設定したが（資料1）、小学校及び高校における学習のレベルと比較し、妥当なものかどうか疑問である。

以上のような地域調査学習の意義や諸問題⁴⁾をふまえ、本研究では、おもに小学校・中学校・高等学校の学習指導要領・指導書及び教科書の比較によって、中学校地理的分野における地域調査学習の目標・内容・学習過程・学習形態と、小学校・高校のものとの異同を明かにする。そして、それに基づいた「身近な地域」の単元展開を構想してみたい。

2. 新学習指導要領（平成元年度版）に示された地域調査学習

(1) 小・中・高における地域調査学習の系統

中学校における地域調査学習について (1)

小学校中学年の目標(3)に「地域における社会的事象を具体的に観察し」と示めされているほか、小学校および中学校社会科、高校地理歴史科・公民科の内容の取り扱いにも、児童・生徒が主体的に学習をすすめていくために多様な学習活動を取り入れること、そのひとつとして観察・調査を行うことが明かにされている。地域調査学習を、地理・歴史・公民の3つの領域にわけて、その系統を示したものが、次の表1である。

表1. 小・中・高の地域調査学習の系統

段 階		地 理 的	歴 史 的	公 民 的
小 学 校	3 年	★(2)人々の生活と自然環境 ★(3)地域の消費生活 ★(4)地域の生産活動	★(5)人々の生活の変化、文化財や年中行事	★(1)公共施設の働き、地域の人々の協力 (3)(4)地域の生産・流通消費
	4 年		★(4)地域の文化や開発に尽した先人の働き	★(1)人々の健康を守る活動 ★(2)人々の安全を守る活動
	5 年	(1)我が国の食料生産 (2)我が国の工業生産 ★(3)イ、我が国の情報通信産業		(1)～(3)経済活動と国民生活の向上
	6 年		★(1)ア、身近な地域の遺跡や文化財	★(2)ア、地方公共団体や国の政治
中 学 校	必 修	(2)ア、(イ) 日本人の生活 ★(2)イ、身近な地域	★(取)(1)、ウ、日本人の生活や生活に根ざした文化 (6)イ、新しい学問・思想と地方の生活文化 (7)エ、近代産業の発展と社会や生活の変化	(1)ア、個人と社会 (2)ア、生活と経済 ウ、経済生活と国際協力 (3)イ、民主政治と政治参加
	選 択	★ 分野間にわたる学習、自由研究的な学習、見学・調査、作業的な学習など (内容は、地理的・歴史的・公民的分野の内容として示されたもの)		
高 校		★地理A (1)、ウ 地域の変容と現代世界 ★地理B (1)、オ 地域の調査と研究	日本史A 3、(3)オ 地域社会の形成と発展 ★日本史B (8) 地域社会の歴史と文化	現代社会 (3)、ア 地域社会の変化と住民の生活 (取) 簡単な社会調査の方法

★印は、地域事象を「観察・見学・調査して」などの表現がある内容を示したものである。そ

の他は、そのような表現はないが、しばしば地域の具体的事例を取り上げて調査活動が行われるものや、地域での調査活動が取り入れやすいものである。従って、地域教材は扱うか調査活動は行わなかったり、他地域の具体的事例を用いて指導しても支障のないものである。

地域調査学習を取り入れた単元の指導目標は、各学年、分野、科目で異なるし、目標に応じて異なる内容や方法で指導されるであろう。しかし、地域に残る著名な文化財とか、農村地帯の生産のようすなど、しばしば同じ地域事象の観察・調査を繰り返すこともある。不要な重複を避けたり、学年間の系統性や関連性を考えた指導を行うためには、指導者が、それぞれの違いを明確にとらえていなければならない。従って、まず、学習指導要領・指導書によって、小・中・高の地域調査学習の相違点や関連を、地理的内容の学習に焦点をあてて明かにしてみたい。

(2) 地域調査学習の「目標」の比較

篠原昭雄⁵⁾は地域学習をそのねらいによって3つの類型に分けている。

- ① 地域なり郷土なりの特色、あるいはそこに住む人々の生活それ自体を究明し理解させようとする、いわゆる目的概念としての扱い方。
- ② その学習で得た見方や考え方、あるいは探究の仕方を他の学習に転化し活用するためのいわゆる方法概念としての扱い方。
- ③ 他の地域や事象あるいは一般の共通性をもつ地域の中の事例としての地域や事象、または、より広い地域をとらえるための事例となる地域や事象を取り上げる場合などのように、言わば理解させようとする学習内容の理解を、実感をもって具体的に深めるための扱い方。

この3つの類型によって、小中高の地域調査学習のねらいを分類すると表2のようになる。

表2. 地域調査学習（地理的内容）のねらい

		教科・分野・科目の目標	学習のねらい
小	3	社会生活についての理解を図り、我が国の国土……に対する理解と愛情を育て……。	主① 従②
	5		主③ 従②
中	地理	地理的な見方や考え方の基礎を培い、広い視野に立った我が国の国土に対する認識を養う。	主①・② 従③
高	地理B	世界の人々の生活・文化に関する地域的特色とその動向を……理解させ、……地理的な見方や考え方を培い……。	主② 従③・①

中学校「身近な地域」のねらいは、「地理的な見方や考え方の基礎を身につけさせるとともに、生徒が生活している土地に対する理解と関心を深めさせる」(P36)ことの2つである。またこの学習で習得した見方・考え方だけでなく、身近な地域についての理解そのものが、他地域をとらえるために比較・関連される基礎的なものとして活用される(ねらい③)。

これに対し、小学校3年での学習のねらいは、自分を含めた地域の人々の生活を支えるもの、影響を及ぼしているものを明かにさせ、社会生活について理解をはかることであると言える。すなわち、中学校では、複雑に関連し合ったいくつかの地理的事象全体の構造から、地域の特色や

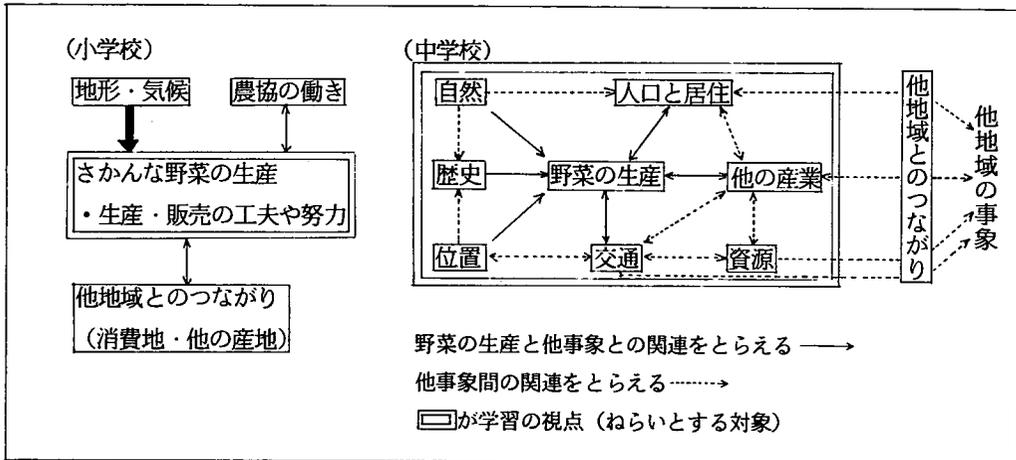


図1. 小学校・中学校の学習の模式図

動向をとらさせる。それに対して、小学校では他事象との関連を明かにするにしても、それは中心となる事象（野菜の生産）そのものの特色や意味をとらえさせるためであり、その関連も単純なものである。模式図で比較すると、図1のような違いがある。

このことは、表3の社会的思考力・判断力の目標の差異にも示されている。

表3. 各学年の社会的思考力・判断力の目標

事象を比較して、相違点や特殊性に気づいたり、事象間の直結的な単純関連をとらえたりする段階から、より多くの視点から、事象を成り立たせている地理的条件をとらえていく段階への発達が示してある。

3	地域社会の社会的事象の特色を考える。
4	社会的事象の特色や相互の関連などについて考える。
5	社会的事象の意味について考える。
6	社会的事象の意味をより広い視野から考える。
地	地理的事象を多面的に考察し公正に判断する……

小学校5年での学習のねらいは、③である。つまり、地域事象は、我が国の産業の特色や国民生活との関連を理解させるための具体的事例として扱われ、地域社会を理解させるための学習ではない。それぞれの産業に従事する人々の一般的な工夫や努力に気づかせることがねらいであり、具体的事例を取り上げる際も、「（そのねらいのために）必要な限りで取り上げるようにする必要がある」（P55～56）と限定されている。

一方、高校地理A「現代と地域」の目標は、「現代世界の特色の理解」と「世界や日本の諸地域を把握する方法についての考察」である。国土認識と世界認識との違いはあるが、中学校とよく似ている。中学校の「地理的な見方・考え方の基礎を培い」⁶⁾の中には、地図・統計その他の資料の活用の仕方とそれらの資料に基づいて適切な判断をする能力の基礎や、地域の特色と変化についてまとめたり発表する能力を養うことが含まれるので、高校の「調査や研究の方法」とほぼ同じであろう。今回の改訂で、「地域の変容に着目させて、国際化の進展の影響が身近な地域にも及んでいることを理解させる」（P40）と地域調査学習の要点が示されている点が、中学校と異なる。

(3) 地域調査学習の「内容」の比較

小学校では表4のように、知識・理解についての目標と内容やその解説の中に、観察・調査の対象と学習の要点が示されている。高校地理Bにおいても、国際化の進展によって地域が変化していることをとらえさせるのにふさわしい地域事象をとり上げることになる。それに対し、中学校では、2つのねらいの達成を考慮しながら、「自然と人々」「産業と地域」「居住と生活」「地域の結び付きと変化」の4つの項目に示されたいくつかの事象をとり上げ、指導者が内容を構成することになっている。その際、留意すべきこととして、次の3点が述べられている。⁷⁾

- ① 地理的諸問題については、生徒の発達段階と学習のねらいに応じた適切なものだけにとどめる。
- ② 地域の変化については、その様子を取り上げること重点をおき、その変化を起こしている要因に着目させる程度に扱う。
- ③ 他地域との関連については、人口や物資の移動のように、比較的容易に観察したり、調査できるものを取り上げる。

従って、①からは、地理的問題（社会問題）が地域を特色づけるものであっても、その問題と

表4. 地域調査の対象と学習の要点

	観察・調査の対象	地域調査学習の要点
3 年	市の地形・土地利用・集落・交通のようす	人々の生活が自然環境と深いかかわりがあること 人々の生活は場所によって違いがあること
	商店や商店街（物品購入、販売）のようす	目的にあわせて購入先を選択していること 販売の工夫、消費生活を通しての他地域とのつながり
	重要な生産活動のようす	生産活動が自然環境を生かして営まれていること 原料の入手や生産品の販売で工夫していること 生産活動を通しての他地域とのつながり
5 年	農産物の生産のようすや従事している人々	自然条件を生かした生産向上の工夫、品種改良、技術改良 消費者の需要に応じた生産の工夫
	水産業に従事している人々	漁場の保全について考え、漁業技術の改善などの工夫や努力、消費者の需要に応えるための工夫
	近代工業の生産に従事している人々	新しい技術の開発や資源の有効な利用及び確保に努めていること、品質の良い製品を作るための工夫や努力
	伝統工業の生産のようすや従事している人々	技術の習得に努める人々の工夫や努力、原料の吟味や土地の気候などとの調和といった工夫や努力
	放送局や新聞社などの情報産業のようすや従事している人々	従事する人々が、情報の伝達にどのようにかかわっているか、その工夫や努力
中学校	自然、資源、産業、人口、村落・都市、文化や伝統、物資や人口の移動などにかかわる事象	（世界や日本の諸地域との比較・関連によって、地域の特色と動向をつかむ）
高校	地域の変容の様子と関係ある事象	（国際化の進展とのかかわり）

他事象を関連づけて原因を追求する学習は、高度な扱いになりがちであると考えられる。また、②からは、地域の変容にかかわる事象については、変化の原因・理由を追求するのではなく、伴って変化していることや影響を及ぼしていることを追求する方が適切であるといえる。

(4) 「内容の取扱い」の比較

中学校では、歴史的分野との関連を図って扱うようにすることが特色である。博物館・郷土資料館などの文化財の見学・調査を通じて行われる、身近な地域の歴史の学習と融合して単元を構成したり、地域の文化や民俗などに関する事象も取り上げて、地域の特色をとらえさせるような扱いが大切であると述べられている。⁸⁾

課題（問題）の発見のための事実認識の段階で、地理的事象に加え歴史的事象の観察・調査を行うのは容易である。しかし、課題（問題）解決の段階で、両方の観察・調査活動が取り入れられるような課題（問題）づくりは、きわめて困難であると考ええる。

観察・調査活動やその結果の表現活動は、次のように小・中・高とも共通して重視されている。小学校 「身近な地域及び国土の遺跡や文化財などの観察や調査を行い、それに基づく表現活動が行われるよう配慮する必要がある。」（P 84）

中学校 「資料を選択し活用する学習活動を重視するとともに作業的・体験的な学習を取り入れるよう配慮するものとする。そのため……観察や調査等の結果を整理し報告書にまとめることなどの活動を取り入れるようにする。」（P 126）

高校 「情報を主体的に活用する学習活動を重視するとともに、作業的・体験的な学習を取り入れるよう配慮するものとする。そのため……観察、見学及び調査・研究したことを発表したり報告書にまとめたりすることなど様々な学習活動を取り入れる……」（P 43・44）

報告書づくりの他に、表現活動や構成活動には次のようなものがあげられる。

- | |
|--|
| ア、新聞づくり、案内文・パンフレットづくり
イ、カルタ・すごろく・クロスワードパズルなどのゲームづくり
ウ、紙（TP）芝居、劇づくり（台本づくり）、模擬インタビュー
エ、スライドづくり、ビデオづくり |
|--|

小学校でこのような多様な方法に触れながら、その経験が活かされていないのが現状である。表現活動を指導過程に位置づけ、課題（問題）に対応した結果の整理と考察が行われるよう指導すべきである。

各学年の取扱いの相違点として、学習過程の各段階で、どの程度生徒の自己学習にまかせるかという点があるが、学習指導要領や指導書からは読みとることができない。ただし、中学校3年の選択教科「社会」において、生徒の興味・関心に応じて自由研究的な学習も実施することになっている。この学習の過程のほとんどが自己学習であることから、それまでに自力で研究をすすめていけるだけの自己学習の経験を積ませておく必要がある。

3. 教科書等に記述された地域調査学習

学習指導の方法については、指導者の創意工夫にゆだねられているために、学習指導要領や指導書には詳細は述べられていない。実際の指導が教科書と同様な方法で行われているわけではないが、その記述を分析することで、各学校段階の差異や共通点を明かにしたい。

(1) 中学校「身近な地域」の記述の比較

8社の地理的分野の教科書⁹⁾を使って、どのような学習過程を考えて記述されているか分析してみた。(略称は9)を参照のこと。→ は明かな前後関係、→ は不明確な前後関係を示す)

K社 地域の変化、地域の特色、地域の産業と生活についての調べ方、他地域との比較の仕方について項目別に記述され、学習過程は不明。

T社 地域の特色と変化、他地域との結びつきについての調べ方が記述され、学習過程は不明。

S社 (地域の特色をあらわしていることからの選択) → 地形図・統計資料等の準備 → テーマに従って観察場所・内容、道順の決定、ルートマップ作成 → 野外観察・聞き取りの実施 → 資料の活用 → 野外観察のまとめ

N社 自分の生活体験の発表 → 地図・統計・資料を使っての調査 → 質問事項・確認内容の決定 → 観察・聞き取りの実施 → 整理・発表

この2社は、野外観察のまとめ・発表で学習を終了している。また、観察・調査の計画までの段階が不明確で、どういう方法でテーマを決めたり、観察・調査内容をどういう基準で決定するのかがわからない。N社は、文献調査と並列して記述してあるため、前後関係は不明である。

O社 地形図の読み取り → 観察・調査の場所・内容・方法の決定、ルートマップ作成 → 実施 → 資料の活用(地域の特色と変化、地域の結びつき) → 調査のまとめ

H社 地形図の読み取り → 読図後の疑問や生活の中で興味をもったことをもとにしたテーマ(調査問題)の決定 → グループ分担、テーマに応じた方法の決定 → 文献調査・野外観察・聞き取り調査の実施 → 調査結果のまとめ(レポート) → 調査結果をもとに、他地域との比較・関連によって地域の特色を調べる。

この2社は、まとめの表現活動の位置づけは異なるが、野外観察・調査結果をもとに地域の特色をとらえるための学習が後に組み込まれている。H社は、S・N・O社が文献調査とは別に野外観察や調査だけの過程を示しているのに対し、両者をともに追求方法として含んだ課題追求(問題解決)の過程を示している。

C社 地形図の読み取り → 野外観察の場所・内容の決定、ルートマップの作成 → 野外観察の実施 → (地域の特色を調べるために) 読図・観察による知識をもとに調査項目・内容の決定 → グループ分担、調査方法の決定 → 聞き取り・観察の実施、資料活用 → 整理・報告文の作成(他地域との比較や身近な地域の役割も考える)

G社 地図の読み取り、諸資料の収集と読み取り → 読み取ったことから興味あることを選び観察項目の決定 → 観察場所・内容の決定、ルートマップ作成 → 野外観察の実施 → 資料も活用し、結果のまとめ → 興味関心をもったもの、地域の特色をあらわすものを選んでテー

中学校における地域調査学習について (I)

マを決定 → 調査 → 調査のまとめ (他地域との比較や身近な地域の役割も考える)

この2社は、1回目の野外観察の後に、その結果をもとにもう一度観察・調査を行う2サイクルの過程を示している。2回目の調査は、ともに地域の特色をとらえるための活動になっている。各社の学習過程を、次のような記号を使って表すと、下の図2のようになる。

- A : 地形図や統計資料・文章資料などを使って学習する。
 B : テーマを決定したり、調査の目的を明確にする。課題を設定する。
 C : 調査項目 (内容) や方法を決め、観察・調査の計画をたてる。
 D : 野外観察・調査を実施する。
 E : 結果を整理し、まとめる。まとめたものを発表する。

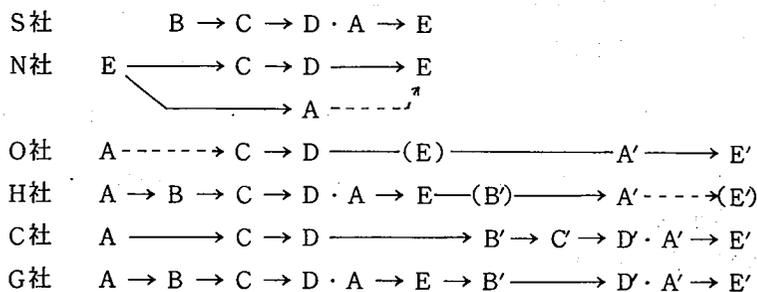
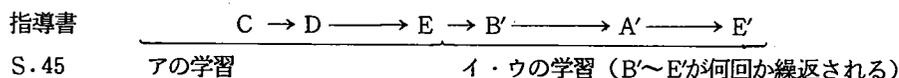


図2. 各社の学習過程

ところで、「身近な地域」についてくわしく述べてある昭和45年版指導書では、内容が「ア、野外の観察と調査」「イ、地域の特色と変化」「ウ、他地域との関連」に分けてある。そして、イとウの学習は、アで取り上げた地理的事象を手がかりにして理解させることになっている。指導書に示された事例の観察・調査事項は、地形や地層、土地利用の状況や変化、商店街の商店の種類や位置、商店街の成立・発展過程などであり、それらを結びつけるような1つの課題が事前にあったとは考えられない。各事項の内容からしても、それらは指導者から示されたものであろう。この過程を、前と同じように示すと次のようになる。



観察・調査活動の取り入れ方によって、学習過程は、次のような3つのパターンが考えられる。

- I. Aの段階で、指導者は身近な地域についての多様な資料を与え、地域の概略をつかませる。
 Bの段階で他事象との関連をとらえる窓口になるような事象を取り上げ、その成立条件を追求するような課題を設定する。それに従って、計画・実施し、まとめる。すなわち、調査活動を地域の特色 (事象間の関連のしかた) を追求し、確かめる段階に取り入れる場合である。

A → B → C → D · A → E (アの学習とイ・ウの学習が並進)

あるいは、課題設定までの地域の概略をつかむ学習をくわしく表すと、次のようにもなる。

A' → B' → A' → E' → B → C → D · A → E

Ⅱ、Aの段階では、予備調査的な資料活用の学習を行い、Bの段階で多様な地域事象についての知識・理解が得られるような課題を設定する。計画・実施し、まとめる。Eの段階までに、個々の地域事象についての事実認識が得られ、それをもとにⅠのBのような新たな課題が作られる。集めた資料を活用したり、先の調査で得られた事実認識をもとに、事象間の関連を明かにしていく。すなわち、調査活動を課題設定のための事実認識を得るために行う場合である。

A → B → C → D · A → E → B' → A' → E' (アの後にイ・ウの学習を行う)

Ⅲ、調査活動を課題設定のための事実認識を得る段階と、ⅠのBのような課題を追求し、確かめる段階に2度取り入れる場合である。

A → B → C → D · A → E → B' → C' → D' · A' → E' (アの後にイ・ウとア)

なお、ⅠのBとⅡのB'とⅢのB'の課題は、Why型で、ⅠのB'とⅡのBとⅢのBは、How型の課題となる場合が多いだろう。

(2) 小学校の地域調査学習の学習過程

中学校では、Ⅱの学習過程をとっているH社の小学校3年と高校地理の教科書を中学校と比較してみた。

小学校3年「みかんづくり」¹⁰⁾(地域の生産活動の特色と工夫)では、問題解決(課題追求)型の基本的な学習過程にそって、次のように記述されている。

A (事実をつかむ) 指導者が提示した地図とグラフから、みかん畑の分布と地形(高低)との関係や、市の農業生産の中でみかん栽培が重要であることを読みとる。

B (問題をつかむ) Aの事実から、「なぜ低い土地や高い土地は少ないか」「なぜみかんづくりがさかんになるのか」の問題をつくり、後者を追求していく。

C (予想をたてる) ①土地があつてる。(以下は写真提示による) ②よく世話をする。
③工夫している。④消費地に近くて交通が便利なのでよく売れる。⑤協力して仕事をすすめている。

(計画をたてる) ○調査内容、①みかん畑の土地のようす。②どんな世話や工夫をしているか。③共同でどんなことをしているか。④売るためにどんな工夫をしているか。

○調査方法、ア、みかん畑のようすの観察(内容①と②)、イ、みかん連合会の見学(内容③と④)

○まとめ方 絵やカード

D (調べて確かめる) アは農家の聞き取り中心。自然環境との関係、仕事の内容や工夫。イも聞き取り。連合会のしくみや仕事、販売の工夫、他町村とのつながり、農家の仕事の変化と要因。

↓
E (まとめる) 絵・カード、話し合い、感想

前述のIのパターンである。Why型の問題で、みかん生産と他の事象との単純な関連を明かにしている。Cの段階で、予想をたてているが、調査の方向や結果のまとめ方を見通すために重要なことである。また、小学校3年の学年段階からすれば当然ではあるが、資料提示から課題設定、観察・調査、まとめの話し合いまで、一斉指導が行われる。これに対し、H社の中学校教科書には、調査内容ごとにグループで分担したり、夏休みを使った個人調査をすすめる記述もみられる。小学校の場合、単元のねらいを達成するためには、1つの問題(課題)から導き出された調査内容の全てを調査しなければならない。一方、中学校は、並列的に同等な価値をもついくつかの調査問題を選択でき、それぞれの問題に応じた調査を行えば、ねらいが達成できるという違いがあるからである。H社は、八代市を例に次のような調査問題をあげている。

- 城下町の名残はどんな形で残っているか。
- 球磨川の洪水をどう防いでいるか。水はどう利用されているか。
- どんな農業経営をしているか。
- 干拓地はどうつくられたのか。
- 八代市はどんな役割を果たしているか。
- 工場は市にとってどんな利益をあたえているか。公害などの問題はないか。
- 八代市の発展のために、市ではどんなことを考えているか。

(3) 高校の地域調査学習 — 教科書から —

高校地理「地域調査」¹¹⁾は、わずか3ページの記述であり詳細はつかみにくいが、野外調査については次のように記述されている。

B-1 調査の具体的な目標をつかむ。



2 調査地域の選定

C-1 調査項目の選定 ←————— A、地図・資料を使った予備調査 D 現地での予備調査



2 日程の作成・経費見積などの準備 ←——— 現地の役場等への連絡

D-調査

E-結果のまとめ、報告書

H社の記述だけで中・高を比較すると、次のような違いがみられる。

- ① Aが、テーマの選択のためだけでなく、予備調査として重視されている。現地で何をどのように調査しなければならないかをしほりこみ、短期間で効率よく調査するために重要である。
- ② Dの現地での予備調査は中学校にはない。B-2とも関係があるが、高校の調査地域は生徒が居住する身近な地域の調査だけではないためである。(今回の改訂で、内容が身近な地域の変容になっているが)
- ③ C-2で、調査計画の範囲が広く考えられている。中学校のねらいが、地理的な見方や考え方の基礎を身につけさせることであるのに対し、高校は、それを含めた調査・研究の方法に

ついて考察させることであるからであろう。指導者の引率がなくても、他地域において自力で調査ができるような生徒を育てるには、指導しておくことが望ましい。

各社の高校教科書は、¹²具体的事例をあげずに調査の方法・手順を中学校よりも詳しく記述している。中学校と違うのは、次のような点である。

学習過程は、H社と同じように基本的にはパターンIで、課題はHow型である。また、予備調査についても、H社と同様に重視し、関係文献や資料の収集・文献目録の作成、文献による予備調査、統計資料の加工・分析などについて述べてある。収集する文献・資料としてあげられているのは、市町村勢要覧・郷土史誌・地域研究の専門書、国勢調査・県市町村の農林漁業・工業・商業統計、地形図・国土基本図・土地利用図・空中写真などであり、地域を舞台にした小説をあげているものもある。現地での予備調査をあげているのは、H社だけである。

テーマや調査の目的については、「地域調査を行う場合、各自の興味や関心から出発するのは当然であるが、それが、地域住民のもつ問題と、どのように関係するかを考えながら、研究テーマをきめることがたいせつである」（K社）や「環境問題の解決のためには、自然的基盤、生活と環境との関係、経済的・社会的・文化的にみた地域の構造を調査研究する必要があり、地域調査もそれにある程度寄与することができる」（T社）などの記述がある。地域の特性を明かにする調査においても、地域の問題点を究明することにつながるようなテーマや調査目的が考えられている。

報告書を作成する前に、調査結果を報告し合い、それについて討議することを組み込んでいる。（D社・F社・K社）「討議では『どのようになっているか』を明かにするだけでなく『なぜそうであるのか』について意見を述べ合うようにすることがのぞましい。こうした討議は、調査のまとめかたや方向づけに重要な意味をもつものである。¹³調査結果の共有化ばかりでなく、調査結果をもとに諸事象間の関連を明かにしていく学習であり、これを重視すれば、学習過程のパターンIIに変化することになる。

(4) 高校の地域調査学習 — 実践事例から —

大阪府立泉陽高等学校の実践事例¹⁴をもとに、指導方法について述べてみたい。

表5は、地域調査のテーマとしてあげられたものの一部である。

表5. 地域調査のテーマ

○環濠「土居川」と阪神高速道路	○保存すべき歴史的街並み
○阪堺線利用者の実態と存続問題	○堺市の都市農業
○巨大スーパーの進出と駅前商店街	○堺市の都市酪農
○和泉市横山地区の買物調査	○堺のミニ開発
○泉北ニュータウンの医療体制とその問題点	○堺におけるマンモス中学校
○泉北ニュータウンが周辺地域に与えた諸影響	○和泉中央丘陵整備計画に対する住民の意識

先に示したH社の八代市を例にした調査問題と比べ、課題性の点で大きく違う。教科書分析でも明らかになったように、高校では、地理の地域調査学習の内容として、地域の社会問題も扱うことができる。

しかし、事例「堺のミニ開発」の場合も、旧市街地の外縁の旧農村地帯における開発の実態を

明かにするための調査活動であり、ミニ開発がこの地域でさかんに行われる原因や理由を直接追求するものではない。調査内容・方法はかなり高度ではあるが、学習過程は「堺市近郊ではどのように住宅建設がすすんでいるか。そこに住む人々はどんな人たちか。」という平易なHow型の課題で、A→Eをたどる学習と基本的には同じものである。

また、地域調査の前に、教師からの設問や説明による1時間巡検を3回行っている。ねらいは、地域をとらえるために必要な基礎的知識の習得、問題点を見抜く力の基礎を養うこと、地域調査の意欲を高めることと述べている。文献等による予備調査でかなりの部分を補えるかもしれないが、調査対象の事象を、地域の風土や歴史の中でとらえていくために有意義である。いきなりテーマ決定を迫るより、意欲的な取り組みも期待できるであろう。

テーマ決定にあたっては、表5のようなテーマを教師が提示し、生徒が選択する「テーマ指定方式」がとられている。理由は、発達段階に応じたオリジナルな調査をさせるため、継続研究により資料的価値を高め地域に成果を還元するため、事前指導を深め、教師側の指導体制を組織的にするため、とされている。生徒の興味・関心から設定したテーマが、追求できないものであったり、追求する意義のないものだったりすることから、このような方法をとることが多い。教師が提示したテーマの中に、生徒が興味・関心をもって追求したくなるものや、初めはつまらないが、調査を進める中で興味・関心がわいてくるものが含まれていれば、学習意欲の点で問題はないと思う。テーマや課題を設定する力は、自分で設定して追求した結果、そのテーマの設定のしかたがどうであったか吟味することによっても育てられる。また、自分の実態や学習のねらいに応じた、適切なテーマや課題を経験することによっても育てられると考える。

テーマ設定だけでなく、調査方法や内容が高度であるため、事前指導・事後指導とも教師が積極的にかかわっている。テーマごとに主担教師をおいて、チームティーチングで行っている。このことから、自己学習場面の設定(学習の個別化)は、学年・学校段階よりも、むしろ調査内容・方法やそれらを決定するテーマや課題のレベルによって決められるべきだと言える。「自ら学ぶ力」を育成するために自己学習場面を多くしていくためには、それが可能なテーマや課題を提示したり、設定させねばならない。

4. 「自ら学ぶ力」の育成と地域調査学習

(1) 自己学習場面の設定

1章で述べたように、本校では「自ら学ぶ力」を「社会的事象の中から問題や課題を発見し、よりよい解決方法を求めて、科学的方法によって主体的に追求できる学習技能と社会的事象にねばり強く立ち向かっていく意欲や意志」ととらえ、学習の方法の基本を習得させ、それを応用して自力で問題解決にあたらせることによって育成しようとしてきた。学習過程のどの段階で生徒自身の力にまかせ、一斉指導から個別指導(自己学習)に切り換えるかによって、多様な指導方法が考えられる。

A Aから個別——自分の既有的知識や興味・関心に応じて、問題を発見したり、課題を設定したりする自由研究的な学習。本校の「地域調査報告書づくり」がこれにあたる。

- B Bから個別——一斉指導で共通の事実認識を得た後、問題や課題を出し合ったり、教師が提示したのから、自分が追求したいものを選択する課題選択的な学習。本校の「公民レポートづくり」がこれにあたる。
- C Cから個別——共通の問題や課題から導き出された予想や、それに基づいた調査項目の中から自分が追求するものを選択する。役割分担的な学習であり、まとめの段階で共有化のための一斉指導が必要。本校の「身近な地域——交通渋滞を中心にして——」や、「地方自治と地域の課題——中海・宍道湖淡水化問題——」などの学習がこれにあたる。
- D Dから個別——調査の目的や内容・方法も同じであるが、教師が引率して一斉に調査活動を行うのではなく、項目によって、個人やグループが自由な順序・進度で行うような学習。
- E Eから個別——Eの後半の発表会とか評価会は一斉指導で行うべきだが、前半のまとめは作業的な活動を行い、一斉調査の結果をもとに個人やグループで多様な表現方法をとらせるような学習。

本校の「身近な地域」¹⁵は、学習過程のパターンがIで、個別化の段階がCである。一方H社の場合は学習過程II、個別化Bである。その違いの根本的な理由は、前者の課題がWhy型、後者がHow型だからである。

(2) 地域調査学習の学習課題

Why型の課題は、「なぜ」「どうして」と問い、原因・理由・条件を追求する。How型の課題は「どのように～」「どんな～」と問い、状況・様態・性質を追求する。松江の交通渋滞の学習で言えば、Why型の場合、「なぜ起きるのか」と問い、理由を追求させた結果、松江の地形の特色、近郊の都市化現象、城下町として発達してきた歴史的背景を、渋滞と関連づけてとらえさせる。一方、How型の場合、交通・地形・人口と居住・歴史のようすを、それぞれ別の課題で追求させてから、「なぜ」と問い、それらの関連をとらえさせることになる。

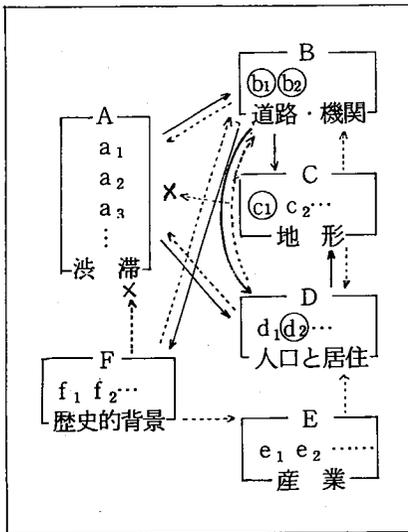


図3. Why型・How型の追求

「A (a₁) が起きたのは、BならばAだから、b₁ b₂ のためだろう。DならばAだから、d₁ d₂ のためでもあろう。さらに、B (b₁) が起きたのは、CならばBだから、c₁ c₂ のためだろう。b₁・b₂・d₁・d₂・c₁・c₂ …が実際に起きているか(あるか)確かめてみよう。調査の結果 b₁・b₂・c₁・d₂ が起きていた。だからこれらがAの原因である。」というのが、Why型の課題による原因・理由の追求である。(→印)

この課題での調査は、b₁・b₂ …という事実があるかどうかを確認することだけが重要であり、調査活動の見通しやゴールをはっきりさせることができる。しかし、論理的に、予想をたてて、それを確かめるためにはどのような事実を確認すればよいか、どんな事実を示す資料を見つけられいいのかを導き出せない生徒も多い。BならばAだとい

う一般の知識がなければ、 b_1 が起きたためだろうという予想はたてられないため、重要な事象間の関連が、予想段階でもれてしまうこともある。

また、BならばAだという判断を十分吟味しなければ、いくら b_1 という事実を確認しても b_1 が原因とは言えない。従って、予想をたてる段階までは一斉指導を行うべきであろう。特に社会科学学習では、 $b_1 \cdot b_2 \dots$ のような事実について知っていて、「BならばAは正しいと言えそうだから $b_1 \cdot b_2 \dots$ が原因だ。CならばAはおかしいから、 $c_1 \cdot c_2 \dots$ は原因とは考えられない」(→印) という判断によって原因・理由の追求を行うことが多いため、 b_1 を確認することよりも、BならばAの判断の真偽の確認が重要な場合が多いためである。

How型の課題の場合、Why型ほど厳密で論理的な予想は要求されない。というより、厳密であるかないかが、調査の結果を大きく左右することはない。How型は、調査をしながら、仮に予想がまちがっていても、訂正したり、新たな事実をつけ加えたりすることができるからである。例えば「人口の増加によって住宅地はどのように拡大していったらうか」という課題に対し、「旧市街地に接している地域から順に広がっていったのではないか」「宅地にしやすい水田や畑が多かった地域から住宅地が拡大したのではないか」「新しい住宅地は、松江市に転入してきた人たちによって作られたらうか」「住宅地の拡大とともに、諸施設も充実されたらうか」などの予想を立てたとする。これは調査の見通しを立て、その内容を決めるのに重要ではあるが、予想が厳密でなくても、「予想に反し、旧市街地に接した地域よりも、周辺の丘陵地から宅地化がすすんだ」という調査結果は得られるであろう。従ってHow型の場合、個別化Bが可能になってくる。

しかし、Why型が調査内容をしばっていきけるのに対し、How型は個人差に応じた調査がしやすいが、何がわかればいいのか、その広がり、深まりが多様であり、ゴールが見えにくい。例えば、「どのように拡大していったのか」は、単に新しい住宅地の分布を明かにすればいいのか、どんな土地が転用されたかを明かにする必要があるのか、人口の増加との関連で住民の性格を明かにする必要があるのか、道路整備などの行政のはたらきを明かにする必要は……と広がっていく。そのために、同じ課題であっても、調査内容・方法はWhy型の課題よりも多様であり、時間や場所の制限などに応じた計画がたてられているかを、教師が入念にチェックしなければならない。また、地域事象を網羅的に追求しがちになる欠点もある。事象間の関連を考える調査後のWhy型課題に基づいて、地域事象を選び、その事象のどういう面を明かにする課題を設定するか十分に検討する必要がある。

How型の課題によって地域事象の意味を明かにした後のWhy型課題の追求は、先の→印の方向で、比較的容易であろう。また、歴史的分野との関連を考えて「身近な地域」の内容を構成する時には、How型の課題が適している。(→P25)

なお、Why型の課題とHow型の課題は、次のような関連があり、図4のように表わせる。

Why型の課題の予想を確かめる調査は、How型の問いで行われる。「なぜ渋滞が起きるのか。」
→ (予想) 「公共交通機関の利用者が減少し、自家用車での通勤が増加してきたためではないだろうか。」
→ (調査) 「公共交通機関の利用者数は、どのように変化してきているだろうか。」

一方、How型の課題の予想は、Why型の問いに支えられている。「住宅地はどのように拡大

していったのだろうか。」→（予想）「水田や畑が多かった地域から拡大していったらう。」←
 （「なぜそのような地域から拡大したのですか。」「平坦な土地は宅地にしやすいからです。」）また、調査結果から、新たなWhy型の課題が生まれる。「水田や畑が宅地にしやすいはずなのに、なぜ丘陵地から宅地が拡大していったのだろうか。」

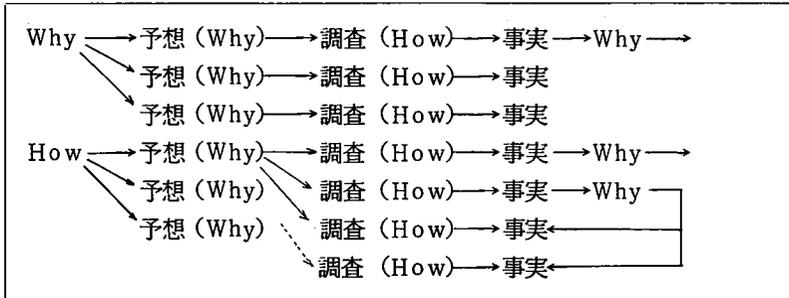


図4. Why型とHow型の課題の関係

(3) 地域調査学習の表現活動

まとめの段階で、報告書づくりなどの表現活動を行うことが重視されていることは、先に述べた。表現活動は「自ら学ぶ力」の育成にとっても大きな役割をはたす。つまり、調査結果が形として表現されるために、発表会等で他との比較が容易であり、「自ら学ぶ力」の具体的な能力である「客観的な自己評価・相互評価の技能」を高めることができる。また、最終的に形として表現しなければならないため、ねばり強く問題解決（課題追求）をしていく態度を養うこともできる。そして、表現活動を取り入れることによって、調査結果の羅列的な報告でなく、結果に基づいて事実を再構成した報告にすることができる。結果をどのように考察し、結論づけるかという作業を通して、地理的な見方や考え方の基礎が培われてくると考える。

小学校3年の教科書にも示されているように、調査計画の段階で表現活動の計画も立てて、観察・調査の際に積極的に資料収集を行わねばならない。表現方法も、画一的に「報告書づくり」と限定せずに、「できるだけわかりやすく伝達する」ということ重視しながら、生徒の個性に応じた工夫をさせることが大切である。また、わかりやすく伝達するための基本的な技能を習得させたり、どのような表現方法が使えるかを指導することも大切である。

ところで(2)で述べた課題の違いによって、まとめの表現活動も異なってくる。Why型の場合は、予想をたてる段階まで一斉指導するために、調査の目的は共通であるし、発表内容も自分の調査内容と関連があるので、結果の共有化が容易である。しかし、そのまとめは、「こういう資料や観察によって、予想どおりこういう事実があった。従って、この問題が起きた原因は、こういうことである。」という内容であり、工夫の余地は少ない。一方How型の場合は、次の課題を追求するための事実認識を得る段階でもあり、各々の課題の追求結果は、後の課題追求に必要な限り共有化しなければならない。しかし、どの課題を追求したかによって、かなりの認識の差が出るであろう。まとめ方は、Why型とは逆に、多様なものが考えやすい。

5. 「身近な地域」の単元構想

(1) 単元「身近な地域～変わりゆく松江のすがた～」について

本校は、城下町の姿をとどめる旧市街地と、近年開発の著しい新市街地（川津地区）との接点に位置している。本構想では、新市街地の都市化のようすに焦点をあてて単元構成を行ってみた。

松江市郊外の川津地区は、昭和30年代までは水田風景の広がる純農村地帯であったが、40年代に入り、島根大学周辺や現在の国道沿線に商店や工場ができ、国道の北側には住宅地が広がっていった。旧市街地の人口が減少傾向にあるのに対し、S40年からS50年の10年間の増加率は100%を越えた。その多くは市外からの転入者であった。また近年は、低湿地のため宅地化が遅れていた水田地帯の土地区画整理事業も行われたり、大型幹線道路も整備され、ますますその傾向が著しい。松江市郊外の都市化は、松江が人口や資本の集積しやすい県庁所在地であることや、既成市街地の再編成がむずかしい観光地であること、東西方向への市街地の拡大が困難な地形であること、さらには核家族化や車社会の進展、農業の衰退などを背景に、よりよい居住環境を求める住民と、住民のニーズに対応して利益をあげようとする企業、そしてそれらにこたえて整備をすすめる行政の活動が、複雑に関連し合っただけで起きたと考えられる。

本単元展開計画の基本的な考え方は次のとおりである。

- 単元目標：地理的見方考え方のうち、地域の諸事象の関連・他地域との関連・地域の特色の変化をとらえる力をおもに培いながら、松江市近郊・川津地区の変化のようすをとらえさせる。
 - 学習内容：都市近郊の都市化現象（地域の産業、人口の動態、交通、開発、都市の機能、生活様式の変化などの都市化現象と関連の深いもの）
 - 学習過程：パターンⅡ、How型課題による調査活動。
 - 学習形態：課題選択後小集団による調査活動を行う。個別化B型。
 - 学習課題：ア、旧市街地はどのようにして形成されたか。そのなごりはどういうところに認められるだろうか。
 - イ、川津地区の住宅地には、いつ頃からどんな人たちが住み、旧市内の住宅地とどんな違いがあるだろうか。
 - ウ、川津地区には、いつ頃からどんな商店や工場ができたか。旧市内の商店とどんな違いがあるだろうか。
 - エ、川津地区の農家は、どんな農業経営をしているか。それは、どのように変化してきているだろうか。
 - オ、川津地区の土地区画整理事業や道路の整備は、いつごろからどのように行われているだろうか。
 - カ、川津地区に古くからある集落では、どのような慣習や伝統が残されているだろうか。近年どのように変化しているだろうか。
- など、川津地区の都市化の諸側面を明かにするための課題を示し、選択させる。アは、歴史的分野の学習との関連で、共通課題にしてもよい。

○表現活動：中学校最初の地域調査学習なので、報告書づくりの基本を指導し、それをもとに工夫させる。

(2) 単元目標分析表

内容	能力		基礎・基本			学び方	情意	
	体験	観察・調査をしよう	認 知		技 能		興味・関心	社会的態度
			事実認識	関係認識				
地図を読む	①大縮尺の地図で現地の景観を思い描く		③松江の市街地が郊外に拡大していることを指摘できる。			⑤縮尺・記号・等高線の意味を理解し、読図・作図ができる。		⑬様々な事物、事象を読みとろうとする。
観察・調査をしよう	②地域の人々とのふれあいの中で、自分の体で得た経験をもとに考える。		④川津地区の変容を指摘できる。	⑥都市化の諸側面を地区内外の事象と比較、関連させて説明できる。	⑩目的に応じて適切な観察、聞きとり、文献・統計資料の調査ができる。	⑨効果的で無理のない観察・調査計画の立案のために、協力して話し合いができる。	⑭予想をもとに、具体的な調査内容・方法を考えることができる。	⑮父母からようすを聞こうとしたり、課外に観察、調査に行こうとする。
松江の変化			⑤都市化に伴って生じた問題点を指摘できる。		⑦松江の変容を松江の特色や社会の動きをふまえて説明できる。	⑪調べたこと、考えたことをわかりやすくまとめたり、発表したりできる。	⑯調査方法、結果を交換しあい、追求の仕方を自己評価、相互評価できる。	⑰他のグループのすぐれた点をまねようとする。
							⑱変容の要因や背景を多様な視点から論理的に考えることができる。	⑱地域住民のひとりとして、自分の生活とかかわらせながら課題を追求し、地域の変容のあり方に対し自分の考えを述べようとする。

中学校における地域調査学習について (I)

(3) 単元展開計画 (全15時間)

時	学 習 活 動	留 意 事 項
5	<p>1. 松江について知っていることをもとに、松江を紹介する文を書く。</p> <p>2. 松江の風土、歴史、産業などに関するVTRを見る。</p> <p>3. 地形図を使い、地図のきまりを調べたり読図や作図の作業をする。</p>	<p>○事前テストも兼ね、自然、歴史と文化、産業と交通、人口と町のようす、他地域とのつながり、問題点の項目を示す。</p> <p>○VTR「松江の自然と文化」「松江の産業と未来」を使い、概要をとらえさせる。</p> <p>○読図・作図の評価をする。</p>
7	<p>4. 新旧空中写真・地形図を比較して、その変化を読みとる。</p> <p>5. 提示された課題から1つ選択し、グループで地域調査をすることによって調べる。</p> <p>① 課題を選択し、グループ編成をする。</p> <p>② 予想をたて、調査内容を決める。</p> <p>③ 地域調査の方法について説明を聞く。</p> <p>④ 調査方法や順序等を決めルートマップを作成する。まとめの計画をたてる。</p> <p>⑤ 野外観察や調査を行う。</p> <p>⑥ 資料を集め、活用する。</p> <p>⑦ 調査結果について話し合い、まとめる。</p> <p>6. まとめたものを使って発表会を行う。 ・自己評価、相互評価を行う。</p>	<p>○(1)であげた課題を提示する</p> <p>○計画表を準備する。(→資料2)</p> <p>○聞き取り調査については、打ち合せ、訪問中や調査後のマナーも指導する。</p> <p>○文献・統計資料に頼りすぎないように多様な方法を考えさせ、野外観察・調査は必ず実施させる。</p> <p>○計画・実施の相互評価をさせる。</p>
3	<p>7. 新しい発見や疑問をもとに課題を設定し、追求する。</p> <p>① 例「川津地区に大型パチンコ店が作られたのはなぜだろうか」(→資料4)</p> <p>② 「松江市の中心部で人口が減少し、郊外で急増しているのはなぜだろうか。またそれに伴ってどんな問題が起きているだろうか」</p> <p>8. 松江の変化についてまとめ、それをもとに将来の動向について自分の考えを書く。</p>	<p>○発表会シナリオ(→資料3)をもとに工夫させる。評価カードを準備し、他の発表のすぐれている点に着目させる。</p> <p>○都市化の諸側面を、地区内外の事象と比較、関連させて総合的にとらえさせるための課題を設定する。</p> <p>○市全体に視野を広げるとともに、他地域とのつながりにも着目させる。</p> <p>○問題点の調査については、「地域調査報告書づくり」で扱う。</p>

6. おわりに

追求する課題の型によって、予想をたてる段階から、調査のまとめや発表の段階まで大きな違いがあり、Why型かHow型かによって、学習過程や学習形態が決まってくる。また、How型の課題は、追求の後にどんなWhy型の課題を設定するかによって決まる。従って、多くの地域事象との関連がとらえやすく、しかも地域を特色づけているような地域事象を取り上げて、「なぜその事象があるのか」と問うことが、「身近な地域」の単元構成のポイントであると考えられる。そのような事象を発見することによって、関連ある事象が浮きあがり、単元の学習内容も決定されるからである。

しかし、このことは、「なぜその事象があるのか」というWhy型の課題によって、地域調査学習を行う方がよいということではない。「何が、どこに、どのような状態であるのか」を明かにする地理的分野の特性からすると、むしろHow型の方が望ましい。しかし、両方の型の課題とも長短があり、安易に結論を出すべきではない。本研究の要約にかえて前章で構想した計画を実践し、Why型のものと比較研究することで明確にしていきたい。

最後に、解決すべき他の課題をいくつか述べて、今年次の研究の締めくくりにしたい。

本論文では、小学校・高校との比較を通して中学校地理的分野の地域調査学習のあり方について述べてきたが、中学校の他分野、特に公民的分野との関連や相違点を明かにする必要がある。また、「自ら学ぶ力」の評価表（→資料1）で各学年の到達レベルは設定したが、各学年の指導にはどのような差異があるのか明確でない。

Why型とHow型の課題を対比して述べてきたが、高校の地域調査にみられるように、調査の過程で変換できるものかもしれない。従って、3つに分類した学習過程のパターンも、区別しがたいものかもしれない。もし、明確に分類できるものであれば、それぞれのパターンにふさわしい内容は、どんなものかを示さねばならない。

地域調査学習の過程全体について述べてきたが、効果的な表現活動の指導のあり方など、1つ1つの段階における指導法についても研究する必要がある。

〈引用・参考文献〉

- 1) 和田淑彦「身近な地域の歴史の学習指導の基本ポイント」小関洋治編、身近な地域の歴史の学習～作業的・体験的学習を生かして～、明治図書、1990
- 2) 大森照夫他編「社会科教育指導用語辞典」260～261、教育出版、1986
- 3) 山崎裕二他「調査活動を生かした社会科学習」第32回島大附中研究発表会要項31～40、1989
島根大学教育学部附属中学校「自ら学ぶ力を育てる学習指導」34～47、東洋館出版社、1989
- 4) 文部省「小学校指導書社会編」1989、「中学校指導書社会編」1989、高校については解説が未刊のため「高等学校学習指導要領 全文と改訂の要点」明治図書、1989、を使用。以下、引用の場合はページ数のみを示す。
- 5) 篠原昭雄「地理教育の本質と展開」200～201、明治図書、1984
- 6) 文部省「中学校指導書社会編」40、1978
- 7) ——「——」41～42、1978
- 8) 山崎裕二「身近な地域の歴史の授業展開プラン」小関洋治編、前掲書。

中学校における地域調査学習について (I)

- 9) K社 奥田義雄他「改訂中学社会 地理」教育出版、1989
T社 能登志雄他「中学新地理 三訂版」帝国書院、1989
S社 市川正巳他「日本の国土と世界 新訂版」清水書院、1985
N社 古川虎雄他「中学社会 地理的分野」日本書籍、1989
O社 西尾陸男他「中学社会 地理的分野」大阪書籍、1989
H社 川田 侃他「新編 新しい社会 地理」東京書籍、1989
C社 町田 貞他「中学生の社会科 世界と日本の国土 地理」中教出版、1989
G社 石田 寛他「中学校 社会 地理的分野」学校図書、1989
- 10) 宇沢弘文他「新訂 新しい社会 3上」64～81、東京書籍、1989
- 11) 沢田 清他「地理」156～158、東京書籍、1984
- 12) S社 市川正巳他「高等学校 地理 三訂版」清水書院、1989
F社 山本正三他「基本 新地理」二宮書店、1989
Y社 前島郁雄他「詳説 地理」山川出版社、1989
K社 石井素介他「新訂 地理」教育出版、1988
D社 朝倉隆太郎他「高等学校改訂版 地理」第一学習社、1989
T社 佐藤 久他「高等地理 最新版」帝国書院、1984
- 13) 朝倉隆太郎他 前掲書、193
- 14) 大島 明他「授業のなかの野外巡検 — 巨大開発と歴史の町『堺』での地域調査指導 —」、地理46
～52、vol27、No.8 古今書院、1982
- 15) 岩田 靖「『学びとる力』を育てる中学校社会科の授業実践 — 地理的分野『身近な地域・松江』の
学習を通して —」島大附中研究紀要第29号、41～52、1987

〈その他の参考文献〉

- 中野尊正「郷土の調査法」古今書院、1987
位野木寿一「指導のための野外観察」中教出版、1972
菊地利夫他「高校地理教育の原理と方法」古今書院、1976
高山昌之編「最新中学校社会科指導法講座 2 地理的分野の授業理論」明治図書、1984

資料1. 「自ら学ぶ力」の評価表

社会科で育成する「自ら学ぶ力」

社会的事象の中から問題や課題を発見し、よりよい解決方法主体的に追求できる学習技能と、社会的事象にねばり強く

※ 具体的なシンプトンは単元内容等ともかかわるので、一般的な基準として抽象的な表現を

学 ぶ 力 年	①社会的事象から問題をとらえる力(社会的事象にかかわる態度)	②多角的・多面的な追求の能力・態度	③科学のプロセスで追求できる力
一 年	<ul style="list-style-type: none"> ○与えられた事実をもとに、自分(の生活や既存の知識)とのかかわりから疑問がもてる。 <ul style="list-style-type: none"> ・同情・憤りなどの情意的な動きを示す言動 ・既存の知識・理解で解決できない葛藤・矛盾などの認知的な動きを示す言動 	<ul style="list-style-type: none"> ○知識や体験をもとに自分なりの予想を複数たてようとする。(教師の援助・示唆によって) ○視点や立場を変えて考えることができる。 ○進むべきコースを複数思いつき、自分なりの理由づけで選択できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○予想を確かめる資料の選択ができる。 ○予想を確かめるための資料の活用(読みとり)ができる。 ○資料から読みとれた事実やそれをもとに解決したことに従って、予想が正しかったかどうか判断できる。
二 年	<ul style="list-style-type: none"> ○社会的事象に関する疑問の中から追求するのにふさわしい、より本質的なものを選択し、問題(課題)を構成できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○検証可能な予想、妥当性の高い予想を選択したり、修正したりできる。 ○他の社会的事象と関連づけたり、比較することにより問題を追求しようとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○追求の見通しがもて、時間・場所・用具等の制限に応じた現実的で、論理的な学習計画がたてられる。(自力で追求の視点が焦点化できる) ○追求結果を資料などを工夫して、わかりやすく発表できる。
三 年	<ul style="list-style-type: none"> ○時事問題などに関心を持ち、多様な方法で得た情報をもとに、自分でより本質的な問いかけができ、問題(課題)設定ができる。 ※社会科の授業に限らず、多様な場面で表れる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○歴史的背景をふまえて因果関係的に、また現状をもとに変化発展的に考え、判断する。(総合的な立場) ○各方法の長所・短所をふまえて、解決方法について自分の意見が述べられる。(betterな解決方法) <ul style="list-style-type: none"> ・条件つきで述べる ・場合わけで述べる ・不利益を受ける立場への目くばりをしながら述べる 	<ul style="list-style-type: none"> ○自力で資料が収集できる。 <ul style="list-style-type: none"> ・不足している資料・必要な資料がわかる ・資料収集のために、多様な機関の利用ができる。 ○追求結果をわかりやすく、独創的な方法でまとめたり発表したりできる。 ○他の人の追求の方法・内容について優れた点・問題点が指摘できる。
考 え ら れ る 評 価 方 法	<ul style="list-style-type: none"> ○提示資料に対する反応(つぶやき・発言) ○感想文の分析 ○設定した課題(問題)の分析 ○スピーチ・日記等の分析 (P)時事問題の知識・理解を問う。 資料を与えて問題設定させて、理由を問う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○授業中の反応、討議内容。 ○模擬インタビュー・手紙などの分析 ○ノート、作品の自由記述(新聞の社説など)の内容分析 ○予想・仮説の内容の分析 (P)社会的態度・価値観を問う論文体テスト 	<ul style="list-style-type: none"> ○資料収集・活用状況の観察・ワークシート・発言の内容 ○学習計画書の分析 ○作品・発表資料の分析 ○発表会・検討会の発言 (P)新しい問題場面での追求方法・資料想定を問う。

法を求めて、科学的方法によって
立ち向かっていく意欲や意志

使う。

④根気強く資料収集や表現活動をする態度	⑤客観的な自己評価・相互評価の技能	ね ら い	
		学 年	共 通
<ul style="list-style-type: none"> ○他の生徒や教師に援助を求めながらも、自分なりの結論を導き出そうとする。 ○指示された形成、内容に従って、自力で表現活動に取り組み、完成させる。形をつくる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○与えられた評価の観点にもとづいて、自己目標をたて、妥当な自己評価ができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○社会的事象を、多角的・多面的な視点から追求する能力や態度を育てる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○社会的事象に興味や関心をもち、ねばり強く追求する態度を育てる。
<ul style="list-style-type: none"> ○自分でたてた学習計画に従って、計画どおりにやりとげようとする。また計画を修正しながらも、結論にたどりつこうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○評価可能で、自分のレベルに適した自己目標をたてることができる。自己目標の実現の度合いを適切な観点を設け、客観的に評価できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○社会的事象を、科学的なプロセスで主体的に追求する能力や態度を育てる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○学習の内容や方法を客観的に自己評価や相互評価したりする能力や態度を育てる。
<ul style="list-style-type: none"> ○人まねでなく、課題や適性に応じた資料収集や表現活動の工夫をしようとする。(積極的に計画を修正・改善していく) ○学習の後も、関連する情報を入手したりして、自分で得た結論を確かなものにしたたり、修正したりしようとする。 		<ul style="list-style-type: none"> ○社会的事象の中から問題や課題を発見し、それを科学的プロセスによって自力で追求し、総合的な立場から問題の解決方法を提言する能力や態度を育てる。 	
<ul style="list-style-type: none"> ○調査・活動状況の観察 ○感想文、自己評価(評定尺度法)の変化 ○作品・発表資料の分析(P)ゲス・フーテストによる相互評価とその変化 	<ul style="list-style-type: none"> ○自己目標の分析 <ul style="list-style-type: none"> ・評価可能か ・能力・態度に応じたものか ○相互評価の文章 <ul style="list-style-type: none"> ・すぐれている点 ・改善すべき点が指摘されているか(作品等) 	<div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; display: inline-block; vertical-align: middle;"></div> は各学年の重点	

資料2. 調査計画表

調査計画をたてよう — 児童・間の取り調査を中心に行いよう。

組 番氏名 _____

グループの進捗課題 _____ 発表の方法・使う材料を考えよう。

順	子題	子題の正しさを示す事実は何か	事象を把握するための方法 (仮の事象はどのようにつけて)	時間	使用する資料	内容
	(何の?) (何の?)	(何の?) (何の?)	どんなことか? どんなことか?	分		

<グループの約束>
<メンバーと役割分担の決め方>
班長()

資料3. 発表会シナリオ

(全班員が、前にならぶ)

A. 只今から〇班の発表を行います。礼 (礼として、A以外は、それぞれの持ち場に、すばやく移動し、準備を行つ。)

A. 僕たちのテーマは、_____で、_____と_____の疑問をもち、観察・調査を行いました。具体的には、_____という方法で、_____ということを調べました。
(丙着)

(この間、調査の目的や方法・内容を示したTPをBが示す。又は、プリントを読ませる)

C. まず、〇〇〇について発表します。(Aが読めてやってもいい) (大きな声で)

- 〇〇〇を見せてください。XXを読んでください。
(BやDは すばやく、TPやスライドをうつす。)
- 間きとり調査の結果(観察の結果)、_____ことがわかりました。(と、調査の結果わかった事実を発表する)
- このことから、僕たちは、_____ではないかと考えました。_____を感じました。(と、事実をもとに考えたこと、感じたことを発表する。)

※ Cは、発表の要点だけのメモを見て、話しこぼして発表する。TPやプリントに書いてあることや発表のシナリオを精読しない。
(E、Cはすばやく交替する。)

E. 次に、〇〇〇について発表します。
(以下、Cの発表と同じ。Aが1人で発表する時も、内容で区切る)

F. 最後に、〇〇〇について発表します。

(視聴者)
(盛大に拍手をする。)

(Aの話を聞きながら、TPやプリントを読む。調査方法や内容におかしいところはないかじっと考える。)

(Cの指示に従い、すばやく反応する。資料をじっと見つめる)

(「なるほど」とうなづく。「あれ、おかしいな」と思って、即、質問したくなるが、手がかりに手をそっとおろし、かまんする。)

(発表を聞きながら、右手はシヨリにノートにメモをとる。)

(Eの音が小さくて、聞こえない。視聴者I「もう大きい大きな声をしてください」)

資料4. 学習シート

2年地理 学習シート 「なぜ川津は変化しているのか。問題は起きていないか。」
～変化の原因や問題点を予想しよう～

組 番氏名 _____

1. パチンコ〇〇〇〇をめぐる重要参考人たち

<p> A 店長(経営者) 56.12.17開店 他不明。</p>	<p>(客) 目撃者の証言から</p>	<p> C (21才・島大生) 西川津町〇〇マンション (後田市生まれ)</p>
<p> B (68才・農業) 住所 菅田町 ・〇〇〇〇に水田を売る。 ・現在水田30aとアパート(6部屋)経営 ・家族 長男(42才) 会社員 妻 (38才) パート(川津.00商店) 孫 中3.小6 ※水田を売った他の農家は不明。</p>	<p> D (48才・会社員) 西川津町 高見団地 (7年前、殿町より転居)</p>	<p> E (33才・工場) 鹿島町 (古志原町〇〇製作所勤務)</p>
	<p> F (27才・店員) 美保岡町 (西川津町〇〇商店勤務)</p>	<p> G (39才・県庁職員) 西川津町〇〇アパート (11年前 蟹川町より転入)</p>

(捜査1) 店長が川津のあの場所に店を作った動機を明らかにせよ!

① _____ ④ _____

② _____ ⑤ _____

③ _____ ⑥ _____